

令和元年度

南相馬市立原町第三中学校

第五十九回

卒業証書授与式 式辞

令和二年三月十三日（金）

於 原町第三中学校体育館

式辞

例年になく暖かい冬が過ぎ、阿武隈の山脈やまなみから吹き下ろす風にも一段と春を感じる今日の佳き日、感染症拡大防止のため、保護者の方々の参加を見合わせる学校も多い中、多数の保護者の皆様のご臨席のもと、第五九回卒業証書授与式を挙行

できますこと、たいへんうれしく思います。

さて、ただ今、卒業証書を手にした二十五名の卒業生の皆さん、卒業おめでとうございます。

今日は、中学校生活最後の日であると同時に、この三年間に培ってきた力を土台にして、さらに高いところを目指すための旅立ちの日でもありません。卒業を機に、これまでの三年間を省みるとともに、これからの人生に向けて、覚悟を新たにすることは、たいへん意義深いことだと考えます。

卒業生の皆さんは、学校の中心となる最上級生として、文化祭をはじめとする学校行事や、生徒会活動を盛り上げ、部活動や文化活動で活躍するなど、素晴らしい成果を残しました。一年間皆さんと共に過ごし、何事にも真剣に向き合う誠実さ、授業や部活動に対するひたむきさにいつも感心していました。

皆さんの輝かしい門出にあたり、夢についての話をしたいと思います。

先日新聞にこのような記事がありました。猪苗代町にある野口英世記念館で、ガーナから玉座の贈呈式があつたという記事です。ガーナと猪苗代町との交流は一九九三年に始まり、歴代の大統領が猪苗代町を訪問しており、今年の東京オリンピック・パラリンピックでは、猪苗代町はガーナのホストタウンとなつています。この度贈呈された玉座は、王族に贈られる特別なもので、日本へは天皇陛下が皇太子時代に寄贈して以来、二例目だということです。

野口英世が黄熱病の研究に打ち込み、ガーナで亡くなったのは一九二八年。ガーナの人々にとって、自分たちのために命がけで尽くしてくれた野

口英世は、一〇〇年経った今でもガーナ国民の英雄なのです。

彼は、猪苗代の故郷を離れるとき、家の柱に「志を得ざれば 再びこの地を踏まず」と刻んだそうです。この志とは「医者になること」だったのでしょうか。その時はそうだったのかもしれませんが。しかし、その後の彼の人生をみると、やけどでくつついた手に 医学によって希望をもらったように、医学を通じて人を助けたい、人の役に立ちたいというのが 夢だったのではないのでしょうか。人を助けたい、人の役に立ちたい という夢に 失敗や終わりなどあるはずがありません。夢の途中で亡くなった彼の大きな夢は、時代を越えて 後の世代まで 確実に引き継がれています。

大きな夢というのは、自分だけではなく 人のためにもなること、よりよい社会を目指すこと、時

代を越えて次の世代にまで託すもの。野口英世はそれを教えてくれています。卒業生の皆さんには、長い人生をかけて、大きな夢を追い続けてほしいと思います。

医療の発達、栄養状態や衛生環境の改善などによつて、人生は一〇〇年時代を迎えていると言われている。一〇〇歳まで生きることが普通になれば、約二〇年学び、約四〇年働くといった年齢による区切りがなくなり、人生の選択肢が多様化すると予想されています。

一〇〇年生きるとした場合、それを一日二四時間置き換えると、十五歳の皆さんは、午前三時三六分の位置にすることになります。まだ日の出前、一日の活動が始めるにもだいぶ早い時間です。夢をもつのも、何かを新たにやり始めるのもこれ

からです。朝日が昇るように、大きな夢を掲げ、失敗を怖れず、大いにチャレンジしてください。

保護者の皆様、本日はお子様のご卒業、誠におめでとうございます。今日の佳き日を迎え、立派に成長されたお子様の姿に、感慨もひとしおのことと存じます。教職員一同、心よりお慶びを申し上げます。

最後になりましたが、卒業生の前途の健やかなることをお祈りし、これまで本校にお寄せいただきましたご支援、ご協力に深く感謝を申し上げます、式辞といたします。

令和二年三月十三日

南相馬市立原町第三中学校長 鈴木 太